

「キリストのかおりを放つ」

～新しい新鮮なかおりを放つために～

¹⁴しかし、神に感謝だ！救世主^{キリスト}に属すかゆえに、私たちをその勝利の行進^{アドヴァン}に加えてくれた。そして、かぐわしい香水のように救世主^{キリスト}についての最高^{ホウ}の知らせを、私たちをとおして広めてくれているのだ。¹⁵神に関するかぎり、私たちの生活には、すばらしい、かぐわしい香りが漂っている。それは、私たちのうちにある救世主^{キリスト}の香りであって、まわりの救われている人にも、救われていない人にも、1つの香りなのだ。¹⁶救われていない人にとっては、私たちは死と滅びの恐れに満ちた香りのように思われる。だが、イエスと関係を築いている人たちにとっては、生命^{いのち}を与える香りなのだ。…」

コリント人への第二の手紙2章14-16節 [アライブ訳]

新しい年号が「令和」に決定致しました。様々なご説明をいただき、なるほど、良い内容だなと感じましたが、正直、自分の中でのフィット感はあまりありません。西暦が主流となっている時代、グローバルな時代にあって、日本独自の年号にどれほどの意義があるのか…。

「温故知新」という言葉があります。もちろん日本人として自分のルーツを知ることで、今に生きる日本人が生き生きと生きるようになる。そのような考え方もよく分かります。しかし、日本人もさらにそのルーツをたどれば、世界共通の人類となりますし、もうそこには文化の違いもなければ、宗教の違いもありません。世界の平和ということを考えた時に、国家民族の違いを明確にすればするほど、その対立は顕著になるのではないのでしょうか。その結果、世界の平和からは遠くことになってしまうのではと危惧されます。

さて、本日の聖書箇所^{第二コリント2章}でパウロは自らの悲しみを訴えています。その悲しみの最も大きな理由は、コリント教会に問題が沢山あったことではなく、その問題に対して、きちんと向き合い、対座し、自らを変えようとしていない頑固さに対してでした。年度が替わり、年号も変わろうとしている中であって、私たちの心も変る必要を感じます。

ツバメがやってきました。去年のツバメたちが残しておいた教会入口の巣に、チャックリと住みかを得ていました。私たちの生きる住みかは昔の方々が残して下さったものかもしれませんが、私たちはまた新しい時代を生きていかなければなりません。変らなければならないのです。「だれでもキリストにあるならば、その人は新しく造られた者である。古いものは過ぎ去った、見よ、すべてが新しくなったのである(2コリント5:17)」。私たちはキリストにあって昔の肉の生き方は完全に新しくされたのですから、すべてを新たにする必要があります。

「イエス・キリストは、きのうも、きょうも、いつまでも変ることがない(ヘブル13:8)」。私たちの信じるイエス様は決して変らないお方ですが、私たちは日々変る存在ですし、主にあって変えらなければならない存在でもあります。日々がチャレンジですが、主にあって、共に変えられ続けたいと願っています。